

横浜市内の郷土史研究グループ

名 称	設 立	会 長	連絡所	会 員	活 動 状 況	刊 行 物
寺尾郷土研究会	昭和42. 4	兼子 道三	東寺尾6-23-11	125人	地元寺尾、鶴見地区の郷土歴史を系統的に調査研究。年数回史跡見学会・研究集会開催	諏訪坂を語る(パンフ) 生見尾村誌(51年刊) 鶴見寺尾城百話(53.3予定)
神奈川区の歴史をさぐる会	51. 5	金子吉之助	区市民課社会教育係	50人	神奈川区内とその周辺の調査見学(旧東海道神奈川宿周辺他5地区)、古老との座談会	神奈川歴史散歩 ①(50年刊) ②(51年刊)
保土ヶ谷区史跡保存会	47. 8	北川順四郎	区市民課地域振興係	60人	区内史跡・名勝の保存、紹介郷土に関する資料の調査、研究紹介。	保土ヶ谷の今昔(46年刊)
郷土戸塚歴史の会	50. 2	内田四方蔵	区市民課社会教育係	235人	拓本教室、古文書教室、史跡めぐりハイイク、歴史講演会、寺めぐり。	会報の発行(年2回) その他資料発行
緑区郷土史研究会	51. 10	未 定	区市民課社会教育係	16人	郷土史研究家の交流と情報交換、古文書等の資料収集、研究成果の紹介等	
瀬谷区の歴史を知る会	49. 2	岩崎 肇	区市民課社会教育係	145人	瀬谷区の歴史編さん、古文書解説月例講座、年寄の話を聞く会、写真記録	会報「青史」(年2回) 瀬谷区の歴史・宗教編(50年刊) 生活資料編(51年刊)
横浜郷土研究会	33. 3	太田俣二郎	横浜市図書館	253人	古文書研究、考古調査研究、社口歴史散歩、発掘調査、発掘調査、考古探検教室、横浜歴史ニュータウンの発掘調査等	会報(年4回) グラフ横浜の歴史(49年刊) 横浜歴史散歩(51年刊)

瀬谷区の歴史を知る会の活動

—— 会員 小林忠秋

五十年六月の中旬瀬谷区役所と、瀬谷区の歴史を知る会の共催で、瀬谷区民俗展が区役所内のフロアと三階大会議室で、六日間盛況裡に開催された。

展示した資料は、区内から発見される古文書を始めとして、江戸時代から昭和初期に至る生活用具等一、三〇〇点の多きを数え、この催しは参観した区民のあらゆる階層を通じ、昔の瀬谷を振り返るもの、また新しく知ろうという心を沸き立たせ、入場者も五千人近くとなかなか好評であった。

開催中は地方新聞にも報道されたこともあって、市外からの見学者も多く、小田原・茅ヶ崎・川崎等からも熱心に来場され、なかには二日、三日と続けて参観された人もいたのには、関係者一同驚きと共に大いに感激した次第である。

これほどの成功を納めた民俗展であったが、これを企画したもの、資料の搬入、展示等にあたるものすべての会員が、実は何の経験もなく、ただ一生懸命の行動が区役所の協力と相俟って、一四区の間でも顕著な催しとして衆目をあつめたことと考えられる。

この民俗展の開催によって、創立以来わずか一年三カ月の無名に等しかった

「瀬谷区の歴史を知る会」が一躍区内の評判となり、実はこの記念行事を開催するものになった「瀬谷区の歴史(宗教編)」の第一巻目の本が、たちまち売切れとなったこと、また会の行動が県史編集室担当者から注目され、同年八月には区内全域の旧家の土蔵等から、同室の指導によって一週間古文書等を探索する仕事を続け、貴重な資料が一万点以上発見されたことなど、昔を知ること努める会員の意気ごみはますます盛んとなったのである。

この古文書資料をもとにした「瀬谷区の歴史(生活資料編)」は、近世古文書の解説と解説、古老の話等を収録した、一冊二七〇頁の限定本として三千冊印刷され、第二巻として、五十一年十月に発刊されたのであった。

第二回発行に当たっても、その後区内から発見された古地図、明治中期から昭和二十年頃までの記録写真、生活衣裳等みなで五〇〇点ほどを瀬谷公会堂の全館を使用して四日間展示、歴史映画、講演、再開された郷土芸能とあわせて記念開催されたのである。

このようにして常に行動する本会は、前記の発見された資料と、これからの行

動によって集められる資料等を編集し、五十三年五月には、第三卷（生活資料編（一））として、明治・大正・昭和二十年までの歴史的記録の集大成（四〇〇頁）を發行予定しているのである。

このような編集行事の他にも、宗教的行事である歌題目の五十年ぶりの復活、区内の地域信仰としての道祖神、地神塔等の修復や再建等に助言するなど、間接的行動による成功例は数多く実現した。

五十二年一月をもって発足以来満三歳の至って幼ない組織で運営されており、今日までの短かい期間に次から次へと行動が出来たということは、会員一同の直向きな郷土愛から生れた一致協力のためものと、会の一員ながら深く感じている次第である。

本会がいちばん大事な仕事と考えているものは、発見された資料を、どう保存したらよいかという問題である。民俗展開催のための資料探しの過程で、区役所の金子社会教育主事を交えた会員の間では、続々と発見される貴重な資料を再び土蔵の中に眠らせること、またもし紛失、焼失等があった場合など、再現可能な物だけに、なんとしてもこれを後世に伝えるような保管方法をと、色々と言葉になった。しかし開催準備に慌ただしく、具体的な協議に至らなかった。

開催中も横浜市文化財課の職員の方が

參觀に来られ、資料の保存方法等について叱声にも似た注意を受けたことがあった。この居丈高とも聞えた職員熱心な声に対し、反発するほどの実績のない会を、当時染々と感じたのであるが、この郷土文化財の保存問題は決して諦めることのない、現在も会の最大の課題とされているのである。

だが、関係当局が指摘するような保管のための資料館建設となると、行動力があっても財力にとほしい小さな民間団体としては、どのような方法をもって対処

地場産業

経済局中小企業指導センター
技術指導係長 渋谷晴男
技術吏員 赤堀郁彦

地場産業の現況

市庁舎二階の貴賓室に入ると、貝で模様を象嵌した大きな衝立が目につく。これが横浜の伝統的な工芸品である芝山漆器である。横浜にはこのほか元町クラシック家具、スカーフなどの地場産業がある。芝山漆器は横浜開港以来の伝統的なものであるが、終戦を境にして輸出面での製品が粗悪化し、現在では細々と生産している。また、元町クラシック家具は横浜に住みついた外人から技術を学び、その後、洋家具の発祥地として栄え元町周辺を中心として製造販売をしてい

したらと常に答に窮するわけである。資料を一堂に集めることは理解と協力によって実現できるが、収納する建物となると土地代、建築費と数値は思考力を鈍らせるのである。

何回かの空論も重ねたが、理想の実現のためには本年度は何んとしても前進したいものである。このためには区内諸団体の衆知をまず集める運動を考えると、関係行政も言放つだけではない暖かい手をと希望する次第である。

る。しかし終戦後職人が少なくなり、また手仕事のため生産規模も小さい。反面スカーフは十数年前までは髪の毛を風から守るくらいしか考えていなかったが、最近ではファッションブームとともに服飾のアクセサリーとして定着してきた。業界も国際商品としてデザインの流れや、品質向上にしのぎを削っている。

芝山漆器の歴史と技術

横浜の芝山漆器は横浜開港とともに発達した。一八五八年日米修好通商条約が結ばれ、そのとき開港場の一つとして横浜村が加わった。その後は幕府の全力投

球によって開発され、間もなく日本の貿易港として生まれ変わり、多くの外人貿易商なども横浜に住むようになり必然的に貿易商品の拡大がなされ、芝山漆器も外人の好奇心に訴え盛んに輸出された。

象嵌細工は奈良朝時代から既に見られたが、芝山漆器は一八〇〇年代に芝山宗一という人によって始められ、後に芝山宗明、貞陵済易政などに受け継がれ、次第に芝山漆器の完成に近づいた。

当時は江戸で芝山漆器を製作し、横浜へ来ては露天などで商売をしていたが、現在のように交通が至便でないため、次第に横浜へ職人が移住し、本格的に芝山漆器を始めた。貿易も盛んになり、明治から大正にかけては蒔絵師五〇軒、塗師一〇〇軒、木地師五〇軒、彫込師五〇軒等の多くの工人が横浜に住み、芝山漆器の黄金時代を築いた。

芝山漆器は象牙材を主に、貝（蝶貝・淡貝・あわび貝・夜光貝）珊瑚等を漆の中に彫り込んで模様を作り、屏風・衝立・飾額・棚等の装飾細工として使用された。工程としては人物・鳥・花などの下絵を描き、それに合わせて貝、象牙材などを形取し、その上を線彫り・色付け（茶こう・青竹・硫黄・食紅等）して形が出来あがる。完成した模様を漆面に刀で彫込み、仕上げる方法を彫込み式と言ひ、また別の方法としては「よせ貝」と